

若者が生まれ育った風土。それが街に花開いたのがアメリカ村だった。

「あのニュースの後、NHKに問い合わせが殺到したんです。アメリカ村の詳しい情報を教えてください。」
当時NHK大阪放送局の記者(現チーフディレクター)だった大塚誠さんは当時の様々な資料を取り出しながら、状況を説明してくれた。



「大塚さん「街が発展するには緊張関係が不可欠。アメリカ村なら心斎橋、またはミナミ全体ならキタ」といった緊張関係があった。今なら長堀通の北側、南船場でしょう。逆に行政がつくった新しい街のしんどうという、その緊張関係のなさにあると思う」

関西は一筋縄ではいかないから面白い 最終回

又なアウトローが創ったアメリカ村の歴史を探る

取材文／中島淳(本誌) 写真／パンリ



↑VAN発祥の地で長谷部さん。「ここは【若松】の北に本社が移ってからも、1階は倉庫、2階は食堂として利用していました。広げているのは70年代前半に店頭で活躍した機織機。こんな版使用ツールの制作も彼の仕事だった

灰屋町 元駆者の系譜。

今から20年前の1978年4月11日、「若者が創り、アメリカ村と呼ばれる大阪市南区炭屋町の事がNHKのニュースで流れた。アメリカ村の名がマスメディアに流れた、最初の出来事だった。その数年前、本誌連載中の日隈萬里子さんのカフェ「ループ」にサーファーの草分けやクルマ好き人間、そしてVANのスタッフが出入りしていたことは見逃せない。戦後のファッション史に二時代を築いたヴァンジャケットは、実は、この炭屋町が発祥の地であったのだ。このシリーズ最終回では、アメリカ村がなぜ誕生したのか、この街を貫くスピリットとは何であったのかを探ってみよう。



→その後VANは膨張を続け、周防町沿いの中村ビル(サンビル)へと移転。「はり重」のある通りに比べたら、中学校があるだけで何もない通りでした。VANがここに移ったことで、周防町は後に「アメリカ村のメインストリート」となる

とリラックスして日々の生活を楽しむ」といった方向が時代の気分だった。西海岸ファッションやアメリカ村は、70年代の流れから見れば、必然のことであった。大塚氏は付け加える。「VANには限界があった。けれど、VANがなかったら、やっぱりアメリカ村は生まれなかったでしょう」。

隆盛、その後の停滞。ビジネスの場としてのアメリカ村の特異性。

では西海岸ファッションがその後もアメリカ村の主流となったかと言え、必ずしもそうではない。「二」は人が育った場所。ファッションビジネスとしてアメリカ村はどうか、と訊かれたら、成功して会社を大きくしたいなら東京へ行くのが一番いいと言っています。当時「トランス・バック」の店主としてあのニューヨークに登場し、現在はエストレーやキャレ大阪などにショップを持つ西村治彦さん

の中心で商売をしている人達の住居が大平という雑居地帯。そんな街に、ヴァンジャケットもオフィスを構え、自社製品を着た社員達が「ループ」に遊びに来ていたのである。

誰もが雑誌を見て、服を求め店に走った。石津謙介のVAN商法。

VANの功績を新聞論調風に言えば、アメリカ東海岸アイビリークの学生に代表されるファッションを日本流にアレンジし、全国津々浦々にまで普及させ、戦後のメンズファッションに多大な影響を与えたことであろう。創業者である石津謙介氏は、VANらしいユニークな商法でファンを増やしていった。今も追随する会社は多い。その一つは「親しまれるネーミング」。トレーナー、チルドレンセーター、スイングトップというポピュラーな単語は、石津氏の命名である。新商品には必ず新しい名前が付いていた。二つ目は「フルセーリング」である。新商品を抱えて小売店に出かけ、「お店で売って下さい」と営業(「フッシュセーリング」)することをしない作

戦だ。商品はまず雑誌に露出させ、それで読者の反響をみる。雑誌を見た読者が買いに来た時、当然商品がなければお客は逃げる。小売店の方から「ダツフルコート20着」といったオーダーが会社に入り、初めて商品は動き出す。80年代の「MENS CLUB」誌などは、毎回VAN新商品の花盛りだった。

またタレントや文化人に着せるといった作戦も彼の功績だ。今やテレビでは常識だが、当時としては画期的なこととで、東野英治郎や吉田伸介ら新劇の役者や、現大阪府知事がリーダーを務めていた漫才の漫面トリオなどが歩く広告塔だった。トリオの一員、上岡龍太郎はVANの服を着てミニ・クーパーで「ループ」に乗りつけていた。布施明、森進一などもVAN派であったというから面白い。

そして三つ目は「付加価値満点のベルティ」である。写真のようなステッカーは、80年代の若者が必ず一度はハマった病気で、記者の中・高校時代には男子ロッカーや学生カバンはVANステッカーの百花繚乱だった。かつてないユニークな商法で日本を席巻したヴァンジャケットは、レナウンを退社した石津氏と2人の賛同者の

手で昭和26年、大阪市南区炭屋町の一角で産声を上げたのである。

若者文化をリードしたVANの先進性と限界。70年代、価値観の変化。

昭和8年生まれ、長谷部勇さんがヴァンジャケットに入社したのは60年代の初期。「社員46人と、実に小ぢんまりとまとまった会社でした。当時の社屋は今のホテル日航大阪の裏にあったのですが、食べ物屋さんや喫茶店以外は本道「何もなかった街でした。社員旅行に1台のバス、という時代。けれどスタッフのノリは抜群だった。「会社というより石津校長の学校という感じだったもんね」(日隈さん)の言葉通り、石津謙介氏自身が「物を売るよりも人間としての常識を持って」という人だったからだ。残業を嫌い、オフタイムの遊びの大切さを説いた。「6時になると、アツという間に会社が空になるんです。店は少なかつたが

天ぷらの「若松」やお気に入りのパーがあつたし、宗右衛門町や道頓堀も近かつたので、よくみんなで行きました。」長谷部さんは石津社長の下で、先述したVANならではの「作戦」の現場指揮官のような仕事に、70年代後半に退社するまでずっと携わっていた。「ステッカー、マッチ、キーホルダー、くし、石鹸、ペナント、手帳……。およそノベルティというものはすべて作りました。またこれが人気があつたので補充するのが大変でした。」だが、急成長した会社には当然試練が待った。社員数は瞬く間に膨れ上がり、最終的には2000人にまで増えた。「300人ぐらいの会社が限度だったと思うんです。商品知識がなく、商品の流れを把握できない人間が増え、それを補うこともできなくなった。手の打ちようがないところまで来てしまった。」皮肉なことにNHKニュースで大塚記者が「炭屋町のアメリカ村」をリポートしたのは、VAN倒産が大々的に報じられた数日後のことだった。

「けれどアメリカ村を創った若者は真



→高校時代からミナミでよく遊んでいた西村さんは、強烈なVAN信者だった。「大学出てVANの服を来てたら、当時のサーフアからVANじゃないか」となんてからかわれたな(笑)。「80年代の「サンフランシスコクロウザー」は、80年代の大阪を代表するインポートブティックである

アメリカ村初登場の1978年4月11日 NHK「ニュースワイド640」

「次の話題ですが、大塚記者のリポートです」[大阪ミナミの炭屋町で、最近若者が西海岸ファッション店を出し、ここが「アメリカ村」と呼ばれているんですよ]

「炭屋町というのは、心斎橋から御堂筋を隔てて西側のエリアのことです」

人通りもまばら。女性の体型も今とかなり違う

ヘアスタイルやGジャンの着方に70年代後半を感じさせる

「トランス・バック」のオーナーとしてインタビューを受ける、当時30歳の西村治彦さん

